磁石フリー磁気変調形二軸モータの自励動作の実機検証

青山 真大* (スズキ), 野口 季彦, 本橋 勇人 (静岡大学)

Experimental Verification of Self-Excitation of PM-Free Magnetic-Modulated Dual-Axis Motor Masahiro Aoyama* (SUZUKI Motor Corporation), Toshihiko Noguchi, Yuto Motohashi (Shizuoka University)

This paper describes a PM-free magnetic-modulated dual-axis motor in which a differencial frequency between the armature fundamental rotating magnetic field and the rotor rotating frequency is effectively utilized for the field magnetization instead of the permanent magnets. A downsized prototype of proposed PM-free magnetic-modulated motor and the benchmark PM-rotor type magnetic-modulated motor are performed for the purpose of principle verification and clarification of drive characteristics. The current phase-vs.-torque characteristics with respect to the locked modulator spatial position are experimentally revealed through the PM-rotor type magnetic-modulated motor. In addition, the self-excitation of proposed PM-free magnetic-modulated motor is experimentally confirmed by the rotor current measurement via a slip-ring.

キーワード:磁気変調,磁気ギアモータ,自己励磁,差分周波数,ダイオード整流回路 **Keywords**: magnetic modulation, magnetic-geared motor, self-excitation, differencial frequency, diode rectifying circuit

1. はじめに

今日,低炭素化社会に向けて輸送機器分野ではハイブリ ッド技術を各種エコカー開発に不可欠なコア技術と位置づ け、その普及に取り組んでいる。近年では、内燃機関の運 動エネルギーと電動コンポーネントによる電気エネルギー の動力を分担するパワースプリット式 HEV システムの小型 化を目的に、図1 に示すような磁気変調形モータを用いた システムが提案されている(1)~(3)。特に小型車両の場合、パ ワートレインの軽量化が燃費と動力性能向上に与える影響 が大きい。一方でモータに比べ低中速域のトルク特性が低 いレシプロエンジンに対して、電動化割合を増やすことで 燃費改善につながる。それらの二律背反の要求に対して, 二軸出力の磁気変調形モータを採用することで図 2 に示す ように従来の遊星ギアとモータを組み合わせたシステムと 等価な HEV システムを構築できる⁽¹⁾。しかし、ステータ側 の回転磁界とロータの回転周波数が非同期で動作するた め, 永久磁石 (PM) に対する外部磁場の変動が大きくなり, 高保磁力磁石を用いるとともに磁石渦電流損の対策が必要 になる。それらの課題に鑑み、筆者らは損失増加の主要因 となっていた磁気変調形モータの非同期駆動(非同期回転 モード)に着目した自励式巻線界磁形磁気変調形モータを 提案した⁽⁴⁾。提案モータは誘導機の電磁誘導原理とダイオー ド整流によって得られる励磁電流を利用することで磁石フ リー化を実現している(5)。本稿では実機検証によりベンチマ







Fig. 2. Collinear chart of magnetic-modulated motor for HEV system.

ークの従来形磁気変調形モータ (PM ロータタイプ)を用い て変調子位置に対する電流位相-トルク特性を明らかにし たのち,提案モータの巻線界磁ロータ (WF ロータ)のロー タ電流を実測して自励動作の確認を行ったので報告する。



Fig. 3. Prototype machine.

Table I.	Specifications of d	lownsized prototype	e machine.
	1	1 21	

Number of stator poles $(2P_s)$	8	
Number of rotor poles $(2P_{pm})$	16	
Number of modulator poles (P_m)	12	
Stator outer diameter	120 mm	
Rotor diameter	61.2 mm	
Axial length of core	49.5 mm	
Air gap length	0.7 mm	
Maximum current	150 A _{rms} (45 s)	
Armature winding resistance	$15.1 \text{ m}\Omega$ / phase	
Number of armature coil-turn	8	
Winding connection	4 series - 2 parallel	
Number of I-coil turn	10	
Number of F-coil turn	11	
I-coil resistance	$79 \text{ m}\Omega$ / pole	
F-coil resistance	$47 \text{ m}\Omega$ / pole	
Thickness of iron core steel plate	0.3 mm (30DH)	

2. 原理検証機と実機評価環境

図3にベンチマーク(PMロータタイプ)と提案モータ(WF ロータタイプ)の原理検証機を示す。モータの主要諸元は 表1に示すとおりである。第4章で述べる提案モータ(WF ロータタイプ)のロータ電流測定は図3(c)に示すようにロー タ上の4つのダイオード整流回路のうち1つをスリップリ ングを介し外部で整流回路を構成し測定している。ベンチ マークの PM ロータに用いている磁石は信越化学工業製 N39UH ($B_r = 1.22 T$, $H_{cb} = 965.7 kA/m$ @293 K)であり,提 案モータの WF ロータに用いるカソードコモン SiC ダイオ ードはローム製(SCS230AE2, $V_R = 650 V$, $I_F = 15 A/leg$)





Fig. 5. Phase reference of modulator lock angle.

である。実機評価環境は図 4 に示すように 2 つの負荷 (Load-1, 2) をそれぞれ独立して速度制御し, ミネベア製ト ルク計 (Torque meter-1, 2) でトルク測定を行う。図示して いないが,電力は HIOKI 製電力計 (PW6001)を用いており, 試作機は Myway プラス製汎用インバータを用いてトルク制 御している。

3. 変調子位置に対する電流位相ートルク特性

磁気変調形モータの基本的な駆動特性を明らかにするた め、まずはベンチマーク(PM ロータ)を用いて電流位相-トルク特性を測定した。今回は図 3(d)の変調子出力軸を図 4(b)に示すように治具を用いてロックし、PM ロータを 150 r/min (電気角周波数 20 Hz)の駆動条件下にてロックされた 変調子位置に対する電流位相ートルク特性を測定した。変 調子ロックの位置は図4(c)に示す角度計(ベベルボックス) を用いて測定した。図5に示す変調子の位置基準位置にて, 電機子起磁力別の変調子ロック位置に対する電流位相ート ルク特性の実測結果を図6示す。CW 方向に機械角で90 deg (変調子の極数換算した電気角で1080 deg,電機子の極数換 算した電気角で 360 deg) まで機械角で1 deg 刻みでロック する位置を変化させて測定した。電流位相基準は変調子ロ ック位置が 0 deg で U 相電機子巻線に対して d 軸(磁石磁極 位置)が対向するようにしている。図 6 より、変調子位置 に対して最大トルクと最小トルクは変化せず、電流位相-トルク特性の MTPA 点の位相のみがシフトしていくことが わかる。同図において変調子位置は電機子の極数で換算し





Fig. 6. Current phase-vs.-torque characteristics with respect to modulator position (measured).

ているが、変調子の極数換算で 1080 deg のため、電機子の 電気角 1 周期中に変調子の鉄心が 3 つ含まれる。よって、 電機子の極数で換算した変調子位置が 0~360 deg 変化した ときに 3 周期の脈動で電流位相-トルク特性の MTPA 点の 位相がシフトしていることが確認できる。さらに電機子起 磁力が増加するに従い、変調子のパーミアンス分布の影響 が大きくなるため変調子位置に対する電流位相-トルク特 性の変化が顕著になる。また、図 3(a)に示すように磁石ロー タは q 軸に溝を設けて第 5 次,第 7 次高調波を低減する設 計をしているため、突極比が低く SPM に近い IPM 構造とな っている。そのため、図 6 で確認できるようにマグネット トルクが支配的な電流位相-トルク特性となっている。

4. 自励動作の実機検証

前章で変調子の位置に対して最大トルクと最小トルクは 変化せず、電流位相ートルク特性の MTPA 点の位相のみが シフトしていくことを明らかにした。本章では変調子の位 置を0 deg で固定し、電機子起磁力が 360 AmsT, 480 AmsT のときに提案モータ(WFロータタイプ)のロータ巻線に流 れるロータ電流を測定することにより、自励動作の実機検 証を行う。図7に示す共線関係が成立する駆動条件下(WF ロータを CCW 方向に 650 r/min)で駆動し、ロータ電流は図 8に示すスリップリングを介してロータ巻線整流回路の1組 をダイオード結線し、クランプ形電流センサを用いて測定



Fig. 7. Collinear chart of experimental condition.

した。図9にロータ電流とU相電機子電流の測定結果を示 す。同図から自励により差分周波数(130 Hz)のロータ電流 が流れていることが確認できる。ここで電機子起磁力 $F_s(\omega_s t)$ を(1),変調子パーミアンス $P(\theta, \omega_n t)$ を(2)で表し、 θ を変調子 の空間的な位相と定義すると磁気変調後のギャップ磁束 $\phi_s(\theta, \omega_s t, \omega_n t)$ は(3)で表される。

$$F_s(\omega_s t) = f_{ac} \cos(P_s \omega_s t - \delta) \tag{1}$$

$$P(\theta, \omega_m t) = \left\{ \lambda_{dc} + \lambda_{ac} \cos(3\theta - \gamma) \right\} \cos P_m \omega_m t \tag{2}$$

$$\begin{split} \phi_{g}(\theta, \omega_{s}t, \omega_{m}t) &= F_{s}(\omega_{s}t)P(\theta, \omega_{m}t) \\ &= f_{ac}\lambda_{dc}\cos(P_{s}\omega_{s}t - \delta)\cos P_{m}\omega_{m}t \\ &+ \frac{1}{2}f_{ac}\lambda_{ac} \begin{cases} \cos((P_{s}\omega_{s} + P_{m}\omega_{m})t - \delta) \\ +\cos((P_{s}\omega_{s} - P_{m}\omega_{m})t - \delta) \end{cases} \\ \end{split}$$
(3)

提案する磁気変調形モータは(4)の共線関係を満たすことで インナーロータ(PM ロータまたは WF ロータ)が高調波同 期駆動する⁽⁶⁾。

$$P_{pm}\omega_{pm} = -(P_s\omega_s - P_m\omega_m) \tag{4}$$

ここで P_{pm} はインナーロータの極対数, ω_{pm} は機械角速度である。今回,変調子ロック(0 r/min)で実機検証しているため, $\omega_{mt} = 0$ とおくと磁気変調後のギャップ磁束は(5)となる。

$$\phi_g(\theta, \omega_s t, 0) = f_{ac} \lambda_{dc} \cos(P_s \omega_s t - \delta) + f_{ac} \lambda_{ac} \cos(P_s \omega_s t - \delta) \cos(3\theta - \gamma)$$
(5)

このとき(4)より, *P_{pm}a_{pm}* = *−P_sa_s*が成立するように電機子 基本波回転磁界の方向に対してインナーロータの回転方向 を逆方向にすることで図 7 の共線関係で駆動することがで きる。一方, (5)より変調子のパーミアンス分布 30が電機子 基本波回転磁界に重畳してギャップ磁束として発生するこ とがわかる。提案モータのロータ巻線は図 10に示すように 整流回路結線されているため変調子のパーミアンス分布 30とWFロータの突極の空間的な位置関係から誘導電流の 順方向と逆方向は同じ波形になるべきである⁽⁶⁾。しかし, 図 9より逆方向の誘導電流振幅が低い結果となった。電機子起 磁力が変化しても同様の結果であることから30以外の高調 波パーミアンス成分が逆相で重畳したことによる影響であ ると考えられる。詳細な分析は今後の課題とする。

5. まとめ

本稿では、磁石ロータタイプの磁気変調形モータにて変 調子をロックさせた場合の変調子位置に対する電流位相-トルク特性を実験的に明らかにした。さらに提案する磁石 フリー磁気変調形モータのロータ電流測定を行い、ステー タ側の回転磁界とロータの回転周波数の差分周波数で自励 できることを実機検証により確認した。今後は変調子も駆 動させ、共線図上の様々な駆動点における電流位相-トル ク特性や効率マップ、ロータ電流の測定を進める予定であ る。

文 献

- (1) M. Fukuoka, K. Nakamura, H. Kato and O. Ichinokura: "A Consideration of the Optimum Configuration of Flux-Modulated Type Dual-Axis Motor", *IEEJ Technical Meeting*, RM-13-141 (2013)
- (2) L. Jian, and K. T. Chau: "Design and Analysis of Integrated Halbach-Magnetic-Geared Permanent-Magnet Motor for Electric Vehicles", *Journal of Asian Electric Vehicles*, Vol.7, pp.1213-1219 (2009)
- (3) K. Atallah, S. Calverley, and D. Howe: "Design, Analysis and Realization of a High-Performance Magnetic Gear", *IEEE Proceedings-Electric Power Applications*, Vol.151, No. 2, pp.135-143 (2004)
- (4) M. Aoyama, Y. Kubota, and T. Noguchi: "Proposal of Rare-Earth-Free Brushless Wound-Field Magnetic Geared Motor for HEV Application", *IEEJ Annual Meeting*, No. 5-037, pp. 68-69 (2015)
- (5) M. Aoyama, and T. Noguchi: "Experimental Verification of Radial-Air-Gap-Type Permanent-Magnet-Free Synchronous Motor Utilizing Space Harmonics with Auxiliary Poles", *IEEJ Trans. I.A.*, Vol. 135, No. 8, pp.869-881 (2015)



Fig. 8. Slip-ring for rotor current measurement.





(b) Under 480 ArmsT.

Fig. 9. Rotor currents and armature U-phase current (measured).



(a) Cross section of proposed magnetic-modulated dual-axis motor.



(b) Rotor winding rectifier circuits.

Fig. 10. Proposed magnetic-modulated dual-axis motor.

(6) M. Aoyama, Y. Kubota, and T. Noguchi: "Study on Rotor Rectifier Circuit of Permanent-Magnet-Free Magnetic Geared Motor for HEV Application", *IEEJ Technical Meeting*, MD-15-076, RM-15-057, VT-15-004 (2015)